

第133号

2025年10月23日

◆発行◆

一般社団法人名古屋労災職業病センター

名古屋市昭和区山手通5-33-1 杉浦医院4階

TEL&FAX: 052-837-7420

e-mail: narita@nagoya-rosai.or.jp

<https://nagoya-rosai.or.jp/>



ネイリストの高久弥生さん（50歳）は、48歳の時に悪性胸膜中皮腫を発症しました。卓球選手だった学生時代に練習をしていた体育館か、かつて事務職として働いていた製菓会社のボイラー室でアスベストにばく露したかもと考えていますが定かではありません（2025年9月10日埼玉県越谷市内 関連記事 P2～P5）



133号目次

- ／＼ 息子が高校を卒業するまでは頑張って生きていきたい
胸膜中皮腫の治療を続けるネイリストの高久弥生さん P2～P5
- ／＼ 超簡単！ AIを使った要約や切り取りでラクラク情報整理
～Googleの「NotebookLM」入門～ P5～P11
- ／＼ アスベスト疾患患者と家族の声をつなぐ名古屋集会を開催 P11～P14
- ／＼ メンタル労災・ハラスメント全国一斉ほっとラインに参加 P14
- ／＼ 事務局臨時休業のお知らせ P14

息子が高校を卒業するまでは頑張って生きていたい 胸膜中皮腫の治療を続けるネイリストの高久弥生さん

2023年4月のある朝、埼玉県越谷市でネイルサロンを営んでいた高久弥生さん（50歳）は、整理をした後に沢山でたゴミ袋を両手に持ち、自宅と近くの集積場のあいだを二往復しました。ぜえぜえと呼吸をしてしまい、最近、運動をしていないからかなと思いました。娘さんと犬の散歩に出た時は、先に走り始めた娘さんを追いかけ、いつもより頑張って走った時、胸部にズキンとした痛みを感じましたが、疲れているのかなと思いました。自宅で横になった時、左側を下にすると苦しいと感じ咳が出ました。咳がちょっと出てコロナに感染したのかな、そのうち治るだろうと思いました。物を取ろうと手を伸ばした時には、体の中でポコポコと音が聞こえました。5月末の休みの日にかかりつけの内科医院の医師に気になっている症状を話すと胸部レントゲンを撮ることになりました。結果は、左肺の半分程が真っ白で医師は水か膿が溜まっている可能性があると言い、市立病院に電話をかけるから今から救急ですぐに行ってと言いました。高久さんは頭が真っ白になりました。

救急外来に入るとCT、レントゲン、何本も抜く採血等沢山の検査が行われました。高久さんは、私は病気なのだろうかと呆然していました。2時間後、医師が来て「処置室で溜まっている胸水を抜きますから」と言いました。どうやって抜くんですかと聞くと、針を刺して抜きますと返答が返ってきました。処置室ではうつ伏せになり胸水を抜きました。看護師さんが10人程と研修医のような医師が来て「そこじゃないよ、ここだよ、今言った事分かってる」というような声が聞こえてきました。麻酔も痛く、私なんでこんな思いしているだろうと思い、涙がボロボロ出てきました。抜いた胸水は1ℓ程で色はおーいお茶のようでした。1週間後、胸水の病理検査の結果を聞きに行きましたが、がんの疑いもあり、どうい病気かを調べるために東京築地の国立がん研究センター中央病院か千葉県柏市の国立がん研究センター東病院の受診を勧められました。高久さんは、自宅から自動車で通える東病院へ転院することにしました。

胸水を抜いてもすぐに溜まってしまい、国立がん研究センター東病院でも3回胸水を抜きました。胸水の色が薄かったことから膠原病の疑いも言われていましたが、中皮腫の疑いもあったことから医師には「先生、私中皮腫じゃないですよね」と聞いていました。その頃、スマートフォンで中皮腫に関する情報を沢山調べ、中皮腫だけは絶対嫌だなと思っていた。全身麻酔の手術で胸腔内組織を採取して行う検査を行い7月、左肺の悪性胸膜中皮腫の病名告知が行われました。告知はご主人と一緒に聞きました。告知後も息苦しかったことから処置室で胸水を抜きましたが、待っている間もスマートフォンで中皮腫に関する情報を見ていきましたが、余命2年、予後が悪い等の情報ばかりでした。告知されたばかりの頃は、スマートフォンとにらめっこをして「むっちゃ泣いていた」と言います。

3人の子供達には、病気を隠すことはしないでちゃんと分かったら言おうと考えていました。中皮腫を発症していることについて伝えた時、子供たちは、「大丈夫だ。治療をすれば治るんだから」と言いましたが、治療をしても完治することはない病気であることを伝えました。社会人の娘さん達は泣いていましたが、当時、中学生だった息子さんは下を向いていました。この時は、泣きながら話しましたが、以後は、「絶対、子供の前で病気のことで泣かない」と決めました。それからは、ちょっとふざけた感じで、「ママが亡くなったらこうしてよ」とわざと明るく言ったりするようになりました。子供達にとっては後々辛かったようですが、そう言いながら、毎日、高久さんは子供達のいないところで泣いたりしていました。病気になったことを受け入れることが出来るようになるのに1年間程かかったということでした。

中皮腫の発症が分かった2023年7月は、高校受験を控えた息子さんの学校見学や説明

会の時期と重なっていました。生検や入院があり、あまり息子さんにやってあげれなかったことが心残りになりました。そのことから受験の時は精一杯と考えていましたが、高校の合格発表の時も抗がん剤治療で入院しており自宅にいることが出来ませんでした。「あと1年半、息子が高校を卒業するまでは頑張って生きていきたい」と涙ぐみながら筆者に話してくれました。

中皮腫がリンパ節に転移していたことから手術はできず、治療は、オプジー・ボとヤーボイの免疫チェックポイント療法が選択され、4回実施されました。しかし、左肺だけでなく右肺にも胸水が溜まり始めたことから免疫チェックポイント阻害薬が効いていないと判断されその後は、アリムタとシスプラチニンの併用療法を2024年6月に終了するまで6回受けました。免疫チェックポイント療法の時は副作用が全く出ずに済みましたが、アリムタとシスプラチニンの抗がん剤治療では、水も通らない、飲めば出す、食べられない寝れないという日々が続きました。

今年3月、医師から左肺の中皮腫が右肺に多発性で飛んでいるかもしれないと言われました。経過を見ながら検査をしたところ5月、右肺への転移が確実であることが分かり、抗がん剤のアリムタを投与する治療を1回行いました。右肺に少し気胸があり、心臓を包む心嚢のまわりにも小さな穴があき空気が入ってしまっている疑いがあり心臓を圧迫する可能性があり、この状態でアリムタを投与すると心停止する恐れがあったことから入院をして治療を受けましたが問題は起きました。6月20日、2回目のアリムタ治療のためがん研究センター東病院へ行った時、医師から「一人で来た?このまま返せない」と言われました。胸部レントゲン写真から、右にも胸水が溜まり始めており左肺もだいぶ水で圧迫されており、気胸も進んでいることが分かりました。緊急入院することになり、管を入れて空気を抜きながら胸水を抜き少し楽になりました。抗がん剤治療は中止となり、主治医は外科の医師と何かできるか話しをすると言いました。外科の医師は、空気が抜ける状態であるから手術をしますといい、空気が漏れている箇所をシートで止めていくと説明しました。2時間位の手術の予定でしたが、倍かかりました。一度塞いで、様子を見ていましたが、中皮腫の腫瘍であちこちに穴があきまだ空気漏れをしているということになり、もう一度開けましたが、モグラたたきのようになってしまったということで最終的に左肺全体をシートで被うことになりました。動脈から抜いた自身の血液を用いる癒着術を2回受け空気漏れは治ったものの、呼吸機能障害が出てしまい、在宅酸素が手放せなくなりました。動脈からなかなか血液が抜けず、何度も針を刺され、痛くて叫んでいたことから麻酔をして血液を抜くことになりました。管が抜け、7月8日に退院となりましたが、抗がん剤治療は終了となり近くの緩和ケア病院を紹介されました。高久さんは主治医を信頼しており、主治医も高久さんに来れるうちは来てもらいたいと言ってくれていることから、通院できるうちはレントゲンが撮影でき、病気の状態が分かることからがん研究センター東病院にご主人様のお休みの日に通いつつ、週2回訪問診療も受けるつもりでいます。

今年の春、高久さんは、中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会北関東支部の集会で、長年にわたり中皮腫の手術を行ってきたベルランド総合病院の岡部和倫医師の講演を聞き、その後、同医師と情報交換をしました。当初、リンパ節転移もあったことから、がん研究センター東病院では、「どこに行っても手術は無理だと言われると思いますよ」と言われましたが、ベルランド総合病院の岡部医師の話を聞き、免疫チェックポイント療法を行い、右肺の胸水が見つかる前であつたら手術が出来たのではと考え、セカンドオピニオンを受けなったことを後悔していると筆者に話してくれました。

筆者は、今年1月25日に那覇市で行われた中皮腫・肺がんアスベスト疾患セミナー in 沖縄で初めて高久さんとお会いしました。集会後の会食の際、少しお話をさせていただき

ましたが、普段はネイリストをしており、明日からはレンタカーで沖縄本島を回るとのお話しを聞きとてもお元気な印象を持ちました。しかし、気胸の手術の後、高久さんの生活は一変しました。その様子を患者と家族の会のY o u T u b eで拝見し、患者と家族の会事務局を通じて、この度、高久さんに取材の申し込みをさせていただきました。

高久さんは、手術後に退院してからの生活で出来なくなってきたことがすごく多いと感じています。住宅街にあるご自宅の居間は、日当たりが良くなるよう2階にありますが、体力がなくなっていることと息苦しさで一階の洗濯機から二階のテラスに洗濯物を運ぶことが困難になりました。「パパからは、出来ないことはやらなくていい」と言われており、洗濯は出勤前にご主人が行ってくれています。子供がまだ晩御飯を食べるうちは少しでも作りたいと思うと言い、腫瘍で腰がすごく痛くなることから座りながら調理を行い、最後にガスコンロを使用する時だけ、燃焼を助ける性質が強い在宅酸素のチューブを鼻から外して必死で調理します。調理の途中で苦しくなり1回止めることがあることから最近はよく壊してしまうこともあります。30分で出来ていた調理が倍かかるようになり、これまで普通に出来ていたことが出来なくなるのはこんなに悔しい事なんだなと話してくれました。お風呂に入るのも体力を消耗するようになり、友人達から汗をかかなければお風呂に入らなければいいと言われましたが、自分のルーティンを崩したくないと思っています。いっぱい出来ないことが増えてきて、苦しくて1か月程悩んだと言いますが、しょうがないと思うようにしようと決めました。高校2年生の息子さんが好きな肉料理は必ず用意します。酸素のチューブを外した状態でから揚げを揚げるの辛いんですねと話してくれましたが、母親の料理がまだ出来るから食べさせてあげたいと考えているということでした。

買い物に行く時は、携帯用酸素ボンベを積んだ車いすに座り、ご主人に押してもらっていますが、知り合いに会うのは心理的に抵抗があるということで、自宅から離れたスーパーマーケットに買い物を行っています。高久さんは、息子さんのサッカーの試合の応援に行くことを昔からの楽しみにしてきましたが、観戦に行く時は日焼けを防ぐため顔まで覆うパーカーを着用して酸素を使用していることが目立たないよう工夫をしています。

高久さんは通信教育で資格を取得し12年前から、自宅でネイルサロンを営んできました。6月20日に緊急入院した時、「なんとなく仕事は無理だなど予感した」と言います。そして、病室のベッドの上でお客さん全員に仕事を止めますとラインを送りました。お客さん達に最後、挨拶もせずに止めることになったことは心残りになっています。とてもよいお客さんばかりで、退院してからもラインをしてくれたり、果物を持って来てくれたりして、すごく恵まれていたなと感じています。高久さんは、「ネイルって月一回のことなので毎月来るじゃないですか。お客さんに止める時によく言われたのは、普通の友達とか親友と会うよりも私と会ってる機会のほうが多いから、みんな色々話してくれたりしているから友達感覚になっているんですよね。親友と一緒に。普通の友達よりも親しく色々な話を聞いてもらった。すごい楽しい時間を過ごさせてもらったと皆言ってくれていた」と筆者に話してくれました。

6月20日に入院した時、動脈血酸素飽和度をパルスオキシメーターで測定するためにあけてあった2本の手の指以外は、ネイルがびっしりついていましたが、手術が決まった時、ご主人に病院まで機械を持って来てもらい、管が身体に刺さっている中、部屋を借りて手と足のネイルをオフ（削ってはがす）し、爪を短く切らなければなりませんでした。ジェルネイルはもともと歯科材料から考えられたネイルなので削る時は、歯科医の治療で用いられるような器具を使用します。

自宅に帰ってきた時、爪はぼろぼろで気力もなくそのままにしていましたが、娘さんから「元ネイリストなんですよ。そんな汚い爪でいいの。ママは、今は体調が悪いけれど、体調が良い時にやれば」と言われ、それもそうだなと思い、できる時はネイルをすることにして

います。娘さん達と親友には、今でもネイルをやってあげています。

高久さんは、海外でも活動しているロックバンド ONE OK ROCK（ワンオクロック）のファンです。バンドボーカルを担当する Taka は、歌手の森進一氏と森昌子氏の長男であることが知られていますが、音楽のため慶應義塾湘南藤沢高等部を1年で中退した後は、父親から勘当されたこともありシンガーソングライターとして独自の道を歩んできました。今年、8月30日と31日、高久さんは、長女とともに横浜の日産スタジアムで行われた ONE OK ROCK のライブコンサートに行きました。長女にこの状態で行くのは不安過ぎると言いましたが、ライブの製作関係の仕事をしている長女からは「大丈夫、大丈夫。私いるし」という答えが返ってきました。1日目は、事前に連絡をしてスタンドの間の通路に設けられた車いす席で演奏を聴きましたが、二日目はステージが目の前にあるファンクラブ限定席が当たっていました。車いす席では遠くのバンドの姿は米粒のようにしか見えませんが、ファンクラブ限定席ではバンドの姿を近くで見ることが出来ることから、高久さんは、二日目は自席にちゃんと行きたいと考えていました。二日目当日は、自席まで車いすで行きスタッフに車いすを預かってもらい、使用中の携帯用酸素ボンベと予備の携帯用酸素ボンベを持って座りました。予備のボンベを自席の下に入れましたが、周りの人達からは大丈夫かなという目で見られたと言います。最初はマスクをしていましたが、ライブが進行していくと、手を振ったり、ジャンプしている風に身体を動かしたりしてはっちゃけていたこともあります。暑くなってきたのでマスクを外し、以前のワンオクライブのシャツをカバーに着せてライブ仕様にしたボンベを立てて演奏を聴きました。娘さんから、「ママ。辛くなったらすぐ座るんだよ」と何回も言われましたが、「アドレナリンが出ていたから結構頑張れちゃう」状態になりましたが、段々背中が痛くなってきたことから座ったり、また立ったりしてどうにか最後までライブを見ることが出来ました。

高久さんは、ONE OK ROCKのライブに行ったことについて、「正直、ライブに来れるのも今回が最後だなって思いながら自分もライブを見ちゃったんですよね。そしたら泣けてきちゃう場面とかもあったりとか、いつもと見る景色が違くて。でも、最後のほうにすごい楽しいなって思ったんですね。そしたら、また来たいと思うので、そのためには頑張んなきゃって。すごい勇気もらつたっていうか、パワーもらって、ストレスも解消できて、また来ないといけないからその為には頑張ろうって。すごい勇気もらえましたね。だから、頑張ります」と話してくれました。今は、ちょっとの無理をして楽しいことをするのもいいじゃないと考えています。

(事務局 成田 博厚)

超簡単！ AIを使った要約や切り取りでラクラク情報整理

～Googleの「NotebookLM」入門～

21世紀初、杉浦裕医師が始めたじん肺学習会に新聞のイベント情報頼りに飛び込んで以来四半世紀。念願の名古屋労災職業病研究会法人化を成し遂げた森亮太理事長と成田博厚副理事長には尊敬と感謝の思いでいっぱいです。労職研の活動を支え、私自身の学びとモチベーションのベースとなっていたいただいた方々とともに一般社団法人名古屋労災職業病センターの誕生を祝うことができた喜びは言葉にできません。

監事を拝命した関係で一文記す機会をいただきましたので、過去を振り返るより、今後の労職センターの活動に有益な今どきの話題を提供することにします。

今どきと言えば「生成AI」ですが、インターネット上の正誤清濁あらゆる情報を参照する「ChatGPT」とは大きく異なる Google の無料サービス「NotebookLM」を紹介します。

「NotebookLM」の面白い点は、自分が選んでアップしたデータの内容だけを使って、まるで秘書のように答えてくれることです。

他のソースの情報は参照せず、アップしたソース＝PDF やテキストファイルはもちろんのこと、音声ファイルも高速で内容把握したうえで複雑な作業をしてくれます。

しかも、PDF はテキスト読み込みの OCR 処理がされていない画像ベースでも自動的に文字起こしをしてくれますし、YouTube の動画アドレスを指定するだけで数十分の動画を数分で内容把握し、要約、特定部分の整理までしてくれて 2 倍速で動画を見るより楽で正確です。

ここでは使い方をイメージしていただくために、パソコンを使って、過去の労職研会報「もくれん」から特定の情報を抽出する事例と、全国安全センターが公開しているハラスメント対応 YouTube 動画（約 45 分）から数分で証拠集めの方法 3 つを要約抽出する事例を紹介します。

使い方の概略

まず、Google 「NotebookLM」を利用するためには Google アカウントです。Google アカウントで Google のサービスにログインできている前提で説明します。

「NotebookLM」の立ち上げ方

Gmail や Google 検索の画面の右上に表示される 9 個の点の四角アイコン（Google アプリ）を選ぶ。

「NotebookLM」のアイコン（ゼムクリップの端の頭だけ黒 3 つ並んだみたいな）を選ぶ。

【画像 1】

（または「NotebookLM」と検索して「NotebookLM」を立ち上げることもできます。）



「NotebookLM」が立ち上がった。【画像 2】



ノートブックという対象データのひとかたまりを作る。

「ノートブックを新規作成」を選ぶ。

「ソースを追加」画面になる。【画像 3】



これで準備完了。

PDF ファイルなどの要約や他の作業を指示するときは、真ん中横長の破線枠「ソースをアップロード」に PDF ファイルなどをドラッグ & ドロップする。

YouTube 動画の要約や他の作業を指示するときは、下の 3 つの四角の真ん中の四角「リンク」の「YouTube」を選び、次の画面で見たい YouTube 動画のアドレスを張り付けて「挿入」を押す。

事例 1

「過去 3 年分の会報「もくれん」からアスベスト被害ホットラインの相談件数を抽出させる。」

【画像 3】の真ん中「ソースをアップロード」に、あらかじめ「もくれん」を 1 年分ずつ保存した PDF ファイル 3 つ（「もくれん-2023 年-労職研.pdf」「もくれん-2024 年-労職研.pdf」「もくれん-2025 年-労職研.pdf」）をドラッグ & ドロップすると、自動的に【画面 4】になる。

画面は 3 つに分かれています、左欄「ソース」に読み込んだ 3 ファイルが表示されています。

真ん中欄「チャット」には「もくれん」を自動的に読み込んで労職センターの活動と記事の要約が表示されています。



ここで、真ん中欄「チャット」の下方枠「入力を開始します」に、次の指示を入力します。

指示

「アスベスト被害ホットラインの報告から名古屋で受けた相談件数を年別に知りたい。」
すると、数秒後に先ほどの要約のあとに続きその回答が流れています。

回答

「アスベスト被害ホットラインの報告によると、名古屋で受け付けられた相談件数は年別

に以下の通りです。

2022年: 2022年12月15日から16日にかけて実施された「全国一斉アスベスト被害ホットライン2022」では、名古屋で63件の相談が寄せられました。このホットラインは、厚生労働省の石綿ばく露作業による労災認定等事業場の公表時期に合わせて毎年行われています。

2023年: 2023年末に「全国アスベストホットライン」が実施され、多数の新たな被災相談が寄せられたとの報告がありますが、名古屋に限定した具体的な相談件数は、提供された資料には記載されていません。

2024年: 2024年12月12日から13日にかけて実施された「全国一斉アスベスト被害ホットライン」では、名古屋で合計65件の相談が寄せられました。内訳は、1日目が45件、2日目が20件でした。」

このように、人の目で探したり、PDFファイル内をいちいち「ホットライン」などの語で検索したりしなくとも、欲しい情報を整理して回答してくれます。

事例2

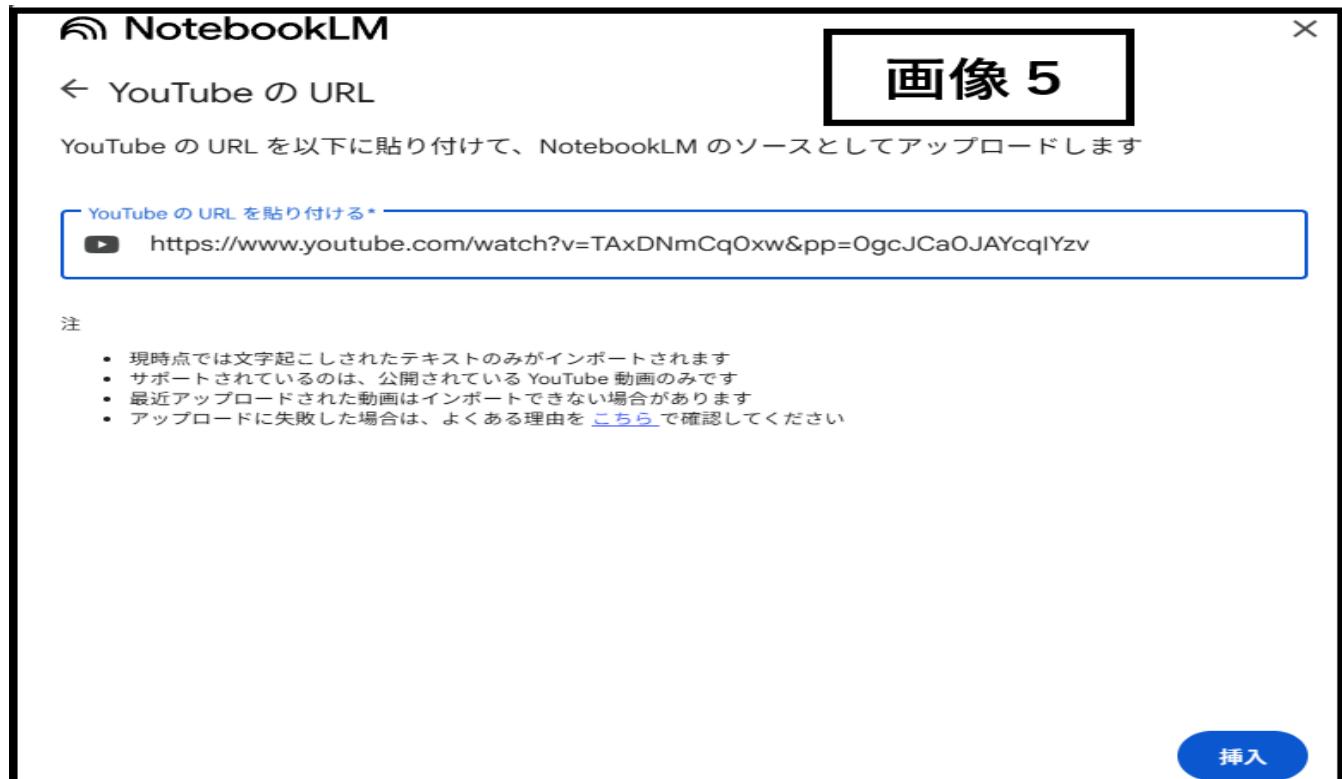
「全国安全センターサイトで公開しているハラスメント対応のYouTube動画（約45分）から証拠集めの方法3つを要約抽出させる」

全国安全センターのサイトで「どうする！ハラスメント 問題解決に向けたアドバイス」という動画が公表されています。NPO法人神奈川労災職業病センターの川本さんが講師を務め、ハラスメント被害にあった労働者へ深く掘り下げるアドバイスをしています。かなり詳細な説明のため動画は約45分におよびます。

このYouTube動画のアドレスはこちら・・

<https://www.youtube.com/watch?v=TAxDNmCqOxw&pp=OgcJCaOJAYcqlYzv>

【画像4】の下の3つの四角の真ん中の四角「リンク」の「YouTube」を選び、次の画面で見たいYouTube動画のアドレスを張り付けます。【画像5】



ここで「挿入」を押す。

すると【画像4】と同様の画面になり、今度は、真ん中欄「チャット」にこの動画の要約が自動的に表示されます。この間20~30秒程度待つだけです。45分の動画を2倍速で流して見るよりはるかに簡単です。

要約：

「このビデオでは、全国労働安全衛生センターが、ハラスメント被害に苦しむ人々への支援と解決策について解説しています。特に、精神疾患に至るほどのハラスメント相談が増加している現状に触れ、被害者が早期に相談することの重要性を強調しています。また、ハラスメントの証拠集めの難しさや、同僚の証言、デジタル記録の有効性について説明しています。会社内部での解決が難しい場合の労働組合への相談、労働安全衛生法や厚生労働省の指針、さらには労災請求の手続きについても具体的なアドバイスが提供されています。最終的には、職場環境を改善し、孤立せずに味方を作ることの重要性が説かれ、退職を検討する際の注意点や成功事例が紹介されています。」

ここでさらに、真ん中欄「チャット」の下方枠「入力を開始します」に、次の指示を入力します。

指示

「証拠集めの具体的な方法を3つ取り出してほしい。」

先の要約の下に次の回答が表示されます。

回答

「ハラスメントの証拠集めにおいて、特に具体的な方法は以下の3点が挙げられます。

同僚からの証言や協力 ハラスメントの問題で最も重要かつ貴重な証拠は、同僚の証言です。被害現場にいなかったとしても、「自分も同じようなことを言われたことがある」という経験や、「あの人は確かにひどい」といった客観的な証言は、録音よりもはるかに被害者の主張の信頼性を高めます。会社に相談する際も、一人で訴えるよりも、様々な立場の同僚が「いつもこのような言い方をしていて困っている」と証言することで、ハラスメントの事実を明確にしやすくなります。また、複数の人が加わることで、会社側の対応が大きく変わる可能性があり、「鬼に金棒」のような効果をもたらします。

LINEやメールなど、文字に残る記録 ハラスメントの証拠として、LINEやメールなどの文字情報も非常に重要です。これらは、口頭での主張に対して「言っていない」と否定されたり、「被害妄想だ」と片付けられたりすることを防ぐ上で有効です。

リアルタイムでの記録 文字に残る記録の中でも、特に「リアルタイムの記録」は真実性・信用性が非常に高く、強力な証拠となります。例えば、「何月何日にこんなことを言われて辛かったので、友人に相談した」といったように、出来事があった直後に記録されたものは、後から一生懸命まとめたものよりも高い証拠能力を持ちます。

なお、録音については、簡単にスマートフォンで録れるため「録音がある」と自慢げに話す人もいますが、実際にはその場の雰囲気まで伝わらず、むしろ「この程度のいじめは大したことない」と判断され、逆の証拠になってしまうこともあるため、あまり役に立たない場合が多いと述べられています。」

まとめと活用

事例で紹介したようなこれらの要約や回答には、元資料の該当箇所へのリンクが設定されているので確実に元資料を確認できる点はとても秀逸です。

さらに、【画像4】右欄「Studio」の「音声解説」を選べば、対話形式の音声ファイルが自動作成されるため、これをスマホなどに保存して持ち歩けば、すき間時間の学習や確認にも使えそうです。

2025年8月末には、「音声解説」の右「動画解説」も日本語に対応しました。これは、ボタン一つで、パワーポイントのように複数スライドで説明してくれる動画を自動的に作成してくれる機能でもっとも活用すべき機能です。

「動画解説」は、長文のPDFや長時間のYouTube動画、その他複数のソースを同一の「ノートブック」に読み込ませて要約した情報を6,7分の短縮動画にまとめてくれます。この動画は他者と共有することも、保存して別の機器で見ることもできます。

事例2のハラスマント対応のYouTube動画（約45分）の短縮版を作成することができるだけではなく、他の言語に設定変更すれば、外国人への説明資料にもなることでしょう。

名古屋労職センターや全国安全センターが保有している行政文書、作成した資料や動画は極めて精度の高い情報源です。これらをテーマごとに読み込ませ複数の言語による動画を作成すれば、外国人も含めた多様な職場の労働者にとって、分かりやすい労働安全衛生の解説の一助になることでしょう。

「NotebookLM」は他の生成AIとは異なり、自分が選んだ情報源のみを利用するため、その情報源を選ぶ側の能力、集団知が、生成データの価値を左右します。名古屋労災職業病研究会の知的資産を受け継いだ名古屋労職センターと全国安全センターの活動に最適なツールとして「NotebookLM」をご紹介します。会員諸団体の皆さんもお試しください。

（監事 榊原 悟志）

アスベスト疾患患者と家族の声をつなぐ名古屋集会を開催

中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会（以下、患者と家族の会）が毎年7月に行っている中皮腫啓発月間の催しの一つとして、7月19日（土）の午後にウインクあいちで「アスベスト疾患患者と家族の声をつなぐ名古屋集会」を開催しました。参加者は、中皮腫の患者さん7名（女性2名、男性5名）を含む21名でした。

冒頭、患者と家族の会の小菅千恵子会長が「この集会は東海支部の再スタート」と挨拶しました。

集会第1部では、患者と家族の会東海支部の胸膜中皮腫患者の渡邊益孝さん（わたなべ よしたか）さんと腹膜中皮腫患者の平田勝久さん、胸膜中皮腫患者遺族で東海支部世話人の後藤里美さんがご自身の体験について講演をしました。司会進行は、東海支部世話人の影山小百合さんが担当しました。

渡邊益孝さん（58歳）は、2010年12月、43歳の時に悪性胸膜中皮腫を発症しました。アリムタとシスプラチニンの抗がん剤治療2回を経て、左胸膜肺全摘術（EPP）と放射線治療を受けた後、2011

年9月に愛知県内の病院での理学療法士の仕事に復帰しました。復帰後、趣味のツーリングの他、野球やゴルフ等のスポーツ、ウォーキングに挑戦してきました。昨年6月、肺が1つ



渡邊益孝さん

になり心臓に負担がかかっていたことが原因で心房に生じる不整脈のひとつである心房細動の発作が起きました。なかなか治まらなかったのでカウンターショックで治めましたが7月には慢性心不全の診断が下りたことから、8月から職場での1日の勤務時間を8時間から6.5時間に短縮してもらいました。そして、11月には心臓アブレーション手術を受けました。

23歳から水門の製作や設計に従事した平田勝久さん(70歳)は、鉄板にけがきをする際にアスベストを含有する石筆を使用したことが原因で2018年9月、63歳の時に腹膜中皮腫を発症しました。当初、アリムタとアバスチンとシスプラチナの抗がん剤を投与する治療を6回受けましたが吐き気や7キロの体重減少、全身の倦怠感などが起きました。6ℓ程あった腹水は半分程になりましたが治療は奏効しませんでした。「こんな辛いおもいをしてこんな効果しかないの」と思ったということでした。アリムタ単剤を投与する治療も3回受けましたが腹水の貯留が元に戻ってしまい効きませんでした。医師の勧めで免疫チェックポイント療法を受けたところ3回目の投与から徐々に腹水が減少し始め、6回の投与後に腹水は完全になりました。その後、全身のかゆみと格闘しながら2年半の期間でオプジーボの投与を67回の受けた後、全身に水ぶくれが出現する水泡性類天疱瘡(すいほうせいるいてんぽうそう)の副作用がでて休薬となりました。休薬後、平田さんは、経過観察とともに休薬に伴う不安や治療による心理的疲れから緩和ケアを受けることにしました。病院内には相談支援センターがありすぐに緩和ケアを受けることが出来たということでした。平田さんは、「緩和ケアというと終末期医療のイメージが強いと思うが、がんの発症が分かった時点から緩和ケアを受けることができ、だれかに話すことにより心のケアにつながり治療についても前向きになれる」と話しました。

後藤里美さん(66歳)は、悪性胸膜中皮腫を発症したご主人の2年間の闘病生活について話しました。2019年2月、ご主人が61歳の時に胸の痛みを感じ総合病院を受診したところ、胸水貯留が見つかりました。胸水を抜いた後、胸膜中皮腫の確定診断を受け、医師からは、手術は出来ず、治療は抗がん剤と緩和治療のみで余命は1年の宣告を受けました。愛知がんセンターに転院しアリムタとシスプラチナの抗がん剤の治療を受けたところ3割程腫瘍が減少し安堵しましたが、3回目の治療の後、耳鳴りが起き、医師よりこれ以上続けると耳が聞こえなくなる恐れがあると言われ中止となりました。その後、アリムタ単剤の治療を受けていましたが、2か月後にはCRPが30になり緊急入院となり、最終的に免疫チェックポイント阻害薬オプジーボの治療を受けることになりました。免疫チェックポイント阻害療



平田勝久さん



後藤里美さん

法は、腫瘍が減少し奏功しました。その後、2か月間程はご夫婦でドライブや温泉に行き、夫婦の時間を楽しみましたが、4回目の免疫チェックポイント療法後、眠くもないのに瞼が垂れてくる症状が起き、5回目の治療の後、専門医を受診したところご主人が副作用の重症筋無力症を発症していました。重症筋無力症は、免疫機能の異常が原因で手足、目、口など様々な場所の筋力が低下する病気です。オプジーボの投与は中止されステロイドの大量点滴等の治療が行われましたが、ご主人は5か月間程入退院を繰り返しました。ちょうどコロナ禍の最中で、後藤さんは、入院しているご主人を見舞うことは出来ませんでしたが、この頃、後藤さんにとて一番辛かったことは、ご主人の舌の筋肉が落ち上手く話せなくなっていましただけでなく、瞼が落ちてくることからスマートフォンの画面を見ることが出来ず、操作が出来なくなってしまっており後藤さんに連絡が取れなくなっていました。入院中のご主人の状況が分からず辛く感じていましたが、幸い、主治医が定期的に電話をくれご主人の状態を伝えてくれていました。一段落した時、腫瘍の転移等がありアリムタ単剤投与の治療が再開されてましたが、ご自身でトイレにも行けないほど容態が急変し、呼吸抑制が起きたことから2021年2月にご主人は亡くなりました。ご主人の闘病生活は、発症の頃から痛みとの戦いだったそうで、様々な薬で症状を抑えながら最後まで自宅で療養が出来たということでした。

3人の講演の後は、患者と家族のグループに分かれ意見交換をしました。患者グループに参加した胸膜中皮腫患者の男性が、大学生の頃に浅野スレート名古屋工場で1か月間アルバイトをしてカナダから輸入されたアスベストの袋を運んでいたという話しや、三重県から参加した腹膜中皮腫患者の女性が他の患者さんと会うのは今日が初めてと話していたのが印象に残りました。



参加者の皆さん

閉会に際し、患者と家族の会の山田哲也副会長が「私は遺族ですが生で皆様のお話しを聞いているとアスベストって酷いなと改めて思いました。これから皆さんのお救済に向けて私たちに何ができるか声を止めないことが一番大事だと思っています。これからも頑張っていきましょう」と挨拶しました。

(事務局 成田 博厚)

メンタル労災・ハラスメント全国一斉ほっとラインに参加

世界メンタルヘルスデーに合わせ10月10日から11日かけて、全国労働安全衛生センター連絡会議は、「メンタル労災・ハラスメント全国一斉ほっとライン」を実施しました。

東海地方からの電話相談は、名古屋労災職業病センターの会場で受け付けました。新聞の告知記事を見た6人の方々から電話を受けましたが、筆者の他、名古屋ふれあいユニオンや愛知健康センター、名古屋シティユニオのスタッフが相談に対応しました。1日目の朝にテレビ愛知の取材を受けましたが、この日、公明党が自民党との連立から離脱したことでの番組内容が変更されてしまったことから、ほっとラインのニュースが落ちてしまい放送されず残念でした。

全国では、二日間で56件の相談があり、名古屋には、自動車部品製造会社で上司や同僚から暴言を浴び続けたことが原因でうつ病を発症したことから労災保険請求をしたところ不支給となり審査請求をしているという愛知の40代男性からの相談等がありました。(成田)

《事務局臨時休業のお知らせ》

大変申し訳ありませんが、10月27日から11月1日まで専従者入院のため事務局を臨時休業とさせていただきます。

センターの活動

2025年9月		2025年10月	
21日	全国労働安全衛生センター連絡会議総会	10日	メンタル労災・ハラスメント全国一斉ほっとライン
30日	全国センターメンタルヘルスハラスメント対策局例会	24日	理事会

【会費・カンパ振込先】

郵便振替 口座番号 00800-7-219145
加入者 一般社団法人名古屋労災職業病センター

発行 一般社団法人名古屋労災職業病センター

発行者：森 亮太
名古屋市昭和区山手通5-33-1 杉浦医院4階
Tel./Fax.052-837-7420
e-mail: narita@nagoya-rosai.or.jp
<https://nagoya-rosai.or.jp/>